キャラクター名
天頼山 ニコル（てらやま にこる）

プレイヤー名

シンドローム	ブラム＝ストーカー エンジェルハィロゥ	ワークス	レネゲイドビーイングD	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	2(17)	性別	男
覚醒	死	衝動	自傷	初期侵食率	39 %
出自	転生体	経験	煩悶	邂逅	幼子

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	5	0	0			5
精神	2	0	0			2
社会	0	1	0			1

HP	24
行動値	12
(非装備時)	12
戦闘移動	17
全力移動	34

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	1		交渉	1	
回避	1		知覚			意志	4		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

思い出の一品	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
転生体	P	N		
生前の己	P 遺志	N 隔意		
"プランナー"都築京香	P 親近感	N 恐怖		
水城 美香	P 懐旧	N 隔意		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
ﾋｭｰﾏﾝｽﾞﾈｲﾊﾞｰ	1	-	常時	至近	自身	自動	RB	
効果：	衝動判定ダイス+[Lv]個。基本浸食+5							
ｵﾘｼﾞﾝ：ヒューマン	1	2	マ	至近	自身	自動	RB	
効果：	ｴﾌｪｸﾄ達成値+[Lv]							
ｵﾘｼﾞﾝ：レジェンド	5	2	マ	至近	自身	自動	RB	
効果：	【精神】達成値+[Lv*2]							
ﾘﾌﾚｯｸｽ：ﾌﾞﾗﾑｽﾄｰｶｰ	2	2	リ	至近	自身	-		
効果：	C値-[Lv]（最低値7）。							
死者の肉体	1	1	リ	至近	自身	対決		
効果：	〈意志〉でドッジ。							
鏡の中の人形	3	3	オ	視界	単体	自動		
効果：	代理ドッジ。Lv回/シナリオ。							
ミラーイメージ	3	4	セ	至近	自身	自動	80%	
効果：	R中ドッジC値-1、攻撃力-5。Lv回/シナリオ。							
トランキリティ	2	3	メ/リ	-	-	-	100%	
効果：	【精神】判定ダイス+[Lv+1]個、HP5消費							
天使の外套	★	-	メ	至近	自身	自動	-	
効果：	外見を上書きして変装。							
瀉血	★	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：	容姿と健康を保つ							
効果：								
効果：								
効果：								

日本人とカナダ人のハーフの少年。
ハーフなので期待されがちだが、運動神経は並程度。外見だけならそれなりにモテそうだが、本人が男とばかりつるむので女っ気はゼロである。
好きな食べ物は蕎麦。特に、冷たい蕎麦類が大好きらしい。

……というのは、生前の『彼』の話。現在の天頼山ニコルという人物は、既に人間ではない。
『死体を素体として動いている支配型レネゲイドビーイング』。それが、現在の彼である。

２年前の交通事故。そこで本来の天頼山ニコルは死亡した。……その死体が、レネゲイドウィルスに感染したのである。
公的には死亡ギリギリの状態から奇跡的に回復したことになってはいるが、その身体は既に死人のそれであり、当然ながら意識もない。現在の彼の身体を動かしているのは、レネゲイドビーイングの持つ意思だけである。
とはいえ、彼が彼でなくなってしまったわけではない。何の因果か、そのレネゲイドビーイングには「生前」の記憶が受け継がれたのだ。
当然、自分が生前の彼でないことは理解している。だが、未だにこの名を手放さないのは……きっと、彼という人間にまだ興味があるからなのだろう。

現在の彼は、レネゲイドビーイングであるという情報を隠しつつ、UGNにオーヴァードとして協力している。
だが、彼も苦悩の只中にある。己は何故生まれてしまったのか。何のためにこの記憶は残ったのか。なぜ、人に交じって生きているのか。
いつの日か、彼の疑問は解決する日は来るのだろうか……。